

小学校英語 のための スキルアップ セミナー

理論と実践を往還する

鈴木 渉・西原哲雄 [編]

板垣信哉・御園和夫・富田かおる・松坂ヒロシ
米倉 綽・西原哲雄・八木克正・高橋 潔
酒井英樹・内野駿介・鈴木 渉・竹森徹士
根本アリソン・安達理恵・山野有紀・坂本ひとみ
[著]

開拓社

小学校英語のためのスキルアップセミナー

理論と実践
を往還する

鈴木 渉
西原哲雄 [編]

開拓社



9784758922739



1923082025008

ISBN978-4-7589-2273-9
C3082 ¥2500E

定価 本体 2500円 + 税



KAITAKUSHA

第10章

英語文学の実践*

根本アリソン

(宮城教育大学)

1. 英語の授業でなぜ絵本を使用するのか？

絵本の読み聞かせでは、例えばエリック カール作「はらぺこあおむし」などのような比較的易しい絵本は、日本を含め世界中の子供たちを含めた早期英語学習者にとって、自然に興味を持ちながら語学能力を発達させるための優れた教材として保護者、教師の両方から認識されてきている。

筆者は20年もの間、小学校での英語の授業の中で絵本を用いてきたが、その経験から絵本ではフレーズの反復リズムによって児童たちがその英単語を容易に思い出し、楽しみながら物語を聞いていることがわかる。そして最も重要なことは英語を覚えようとする以前に、まずその活動そのものを楽しんでもらうことである。

さらに、温かく落ち着いた雰囲気の中で児童たちの保護者や先生と一緒に絵本を読むということは、児童たちの読み書き能力を発達させていく上で非

* 本章は、根本アリソン特任教授が、「小学校英語の授業に生かせるスキルアップ講座(文部科学省委託事業：宮城教育大学主催)」にて行った講習もとにした内容を英文で執筆し、その一部を根本アリソンと西原哲雄(宮城教育大学)が共同で日本語に訳出したものである。

本章を執筆するにあたり、Karen Masatsugu 氏、梁瀬千起氏、Patricia Daly Oe 氏、Judith O'Loughlin 氏、木村侑香子氏に特に感謝したい。さらに、今までに多くの方々から筆者に素晴らしい絵本を紹介し、また絵本から広がる様々な活動を共有して下さった方々にも心から感謝したい。

常に重要であるということがわかる。

物語は児童たちの興味を捉えるようで、集中力を促し、聞く力を持続させ、次に何が起こるかを予測させる力を養ってくれる。子供たちは読んでほしいがために幾度も同じ物語を要求し、その行為から読み聞かせが児童たちの発育段階に一体どのように影響しているのかを垣間見ることができるからである。

児童たちは授業の中で彼ら自身の母語の本での楽しかった体験を生かし、今度はそれを外国語の読み聞かせの活動の中でも容易に受け入れてくれるようになる。単に言葉や絵だけではなく物語を読む人の豊かな表情や動作を取り入れることも外国語を理解する上での大切な要素となる。

言葉を学ぶ児童たちのために声を出して読み手が絵本を読むことは、仮に彼らがすべての単語を知らなかったとしても概略的な意味を把握し、物事を学ぶ上でたいへん重要な能力の発達を促してゆく。

読み聞かせ活動を継続して行うということは、聞きとる能力を発達させていくということの意味しており、Wright (1995) は言葉を学ぶ児童たちの本質的な技能の観念として、「すべてを理解するのではなく、あくまでも肯定的な態度で」あるいは「意味を探り、予想、そして推測するために調べようとする行為が大切である」(Wright 1995: 4) と述べている。

これに加えて、彼は特定のリズム、イントネーション、発音を聞くことを通して児童は全体的な雰囲気と外国語の音を獲得することが可能になると述べている (Wright 1995: 5)。

聞きとる能力は、例えば「はらぺこあおむし」の物語の中で“but he was still hungry”のように、幾度も反復された表現を通してさらに発達が促されてゆく。

また、新しい単語の“butterfly”が同じ物語の中の最後に、絵として現れることによって、この新しい単語が習得されやすくなる。

教師は授業の中で、絵本のイラストを見せながら、児童たちに対して新しい単語の内容に導いて行く。意味を訳する必要性はさほど重要では無いと言っても過言ではない。英語を学ぶ児童たちにとっては1つの絵が新しい単語を連想させ、記憶することを容易にさせてくれる。

同様に文脈の中で使われている単語群もまた、付随して記憶することが可能となる。

ほとんどの絵本の中の単語は全くシンプルで、それ故に物語の中で一体どのようなことが起きているかを簡単に想像することができる。

もし児童たちが知らない単語に出会ったとしても、その物語の状況を提示することで、その単語の意味を理解しイメージすることが可能となるであろう。言葉を反復し調子を合わせながらこれらの新しい単語や文章と一緒に音読することにより、自然にその言語を習得することができるようになっていく。

それでは英語を母語とする子供たちはどうであろうか？ Cameron (2001) はニュージーランドの Elley (1989) の研究を紹介している。「7～8歳の子供たちの語彙数は、教師が児童たちの注意力を喚起集中させながら物語を聞かせることが、より意味深い文脈に頼ることで、単に単語数を増やすといったことよりもさらに効果的に単語を学習し、持続することが可能になる。」と提唱している。

絵を加えた説明は加えない場合よりも、新しい語彙を時間にして2倍程度、記憶の中に持続させる。この事実は児童たちの3ヶ月後のテストの中でも語彙の維持が継続されていることから証明されている。

“The Natural Approach” (Krashen and Terrell 1983) の中でもまた「言語はメッセージを伝える際の最も有効な手段であり、意識的な学習のためのものではない。」と言及している。それは読み聞かせの活動の中でも絶えず起こりうる事実でもある。

筆者の経験では、児童たちの観点からの読み聞かせという行為は、自然に児童たちを安心させ、新しい言語を学べる状態に導いていくことであると理解している。

もし教師たちが全く正反対の状況を作り出してしまったとしたら、児童たちは不安な状態やプレッシャーを感じ、学ぶことは一層困難な状況に陥ってしまうであろう。

大人たちでさえ自分の両親に読んでもらった時のような、懐かしい安心感や温もりを思い出して微笑みを浮かべるようになることがある。

このようにリラックスし、集中した状態の中では、絵そのものが持つ多大な効力によって、その物語が幾分難しい内容であったとしても、児童は次第に不安を無くしていきながら、自分自身が物語の内容を徐々に理解し始めていることを感じるようになる。

しかも、本の読み聞かせは英語の単語やフレーズを学ばせるだけではなく、それ以上の様々な事柄を子供たちに学ばせる絶好のチャンスでもある。

また、物語を皆で分かち合うために、本の表紙を開いた瞬間から、その本の展開やそれぞれの魅力的な登場人物たちによって子供たちはさらに絵本の世界へと引き込まれていくことになる。

物語は読者の感性の発達を促してくれるが、それらは言葉の意味についてだけではなく、物語の中に潜在するメッセージが母語と同じくらい児童たちの心を動かすことができる。

読者は、他人の置かれた状況の中に、自分の立場を置き換えてみることによってほかの人々が持っている複雑な感情の内面を知り、そうして初めて読者は相手の置かれている立場を理解することができる。

しかしながら英語の授業の中で、我々が使いたい上記のような絵本の多くは、英語を母語としない子供たちのための英語学習の目的で書かれたものではない。したがって、それらは英語表現の中では非常に自然な文章体ではあるが、いくつかの単語やフレーズは外国語を学ぶ児童たちにとっては難しいものもある。

それらは先に述べたように英語圏内では全く自然な英文であり、子供たちが英語の音とリズムに注意しながら自然な話し方とフレーズを持続して聞き親しむことにより、絵本からの体系的な指導方法によって外国語に対する意識の変化を芽生えさせることができる。

我々が児童と共有したいいくつかの本の中には難しい語彙を含んでいるものも存在するが、決して極端に難し過ぎるものではない。なぜならば、その絵本の中の状況においては普段の会話の中で使われている日常的な単語や、その文脈の流れの中で最も自然な表現がされているからである。

例えば、児童たちがすでに“big”という単語を知っているかも知れないが、物語の中では“enormous”という表現を使っているものもある。それ

はほとんど“big”と同じ意味合いを持つが、レベル的には比較的難しい単語ではあるが、その本のイラストを見ることにより、意味がとらえやすい単語となる場合がある。

2. 絵本の選び方

絵本の利点を考えると、カリキュラムの中で、絵本を取り入れてみたいと思うような気持ちが芽生えるかも知れないが、それを始める際に一体どのようなことから始めるべきであろうか？

まずは英語の授業のためには、どのような読み聞かせの本を選択すべきであろうか？ 最初の段階では、自分自身でできる限りたくさん絵本を読んでもらうことである。

他言語の絵本の中には、日本語に翻訳されている本もあり、近くの図書館でも容易に借りることが可能である。もしそれらが児童たちにとって適切なものであると考えたならば、後で英語版を購入すればよいのである。教師自身が本当に気に入った本があれば、それらなどから始めるのが好ましいと言えるであろう。

教師たちがその本、挿絵、登場人物、あらすじ、などに共感したならば、是非読んでみたいと思う方向に流れていくはずである。

しかし、留意しなければならない点として、「児童たちが物語の全体的なメッセージや文化的背景、言語の違いというような観点から、それを読むことによって一体何をすることができるのか？」ということ十分に考慮しなければならない。

絵とストーリーは児童たちにとって興味が自然と湧いてくるものだろうか？ その価値観は時代背景に合致したもので公正、なおかつ固定観念化されてはいないだろうか？

また、その物語は児童たちにとってその本の道徳観は理解し得るものだろうか？ この道徳観がまだ十分に浸透していない授業の中で、絵本は児童たちがほかの人を理解する手段となるのである。

児童たちが物語を英語で楽しむためのサポートを教師側から受けることに

よって十分にその物語を理解することが可能であると思われるが、物語を通して一体彼らにいくつかの新しい単語とフレーズを学ばせることができるだろうか？ また、英語の授業とは全く別の状況にも対応し、応用することができるであろうか？

どのように行えば、教師の声、表情、ジェスチャーや日本語のヒントはその物語を児童たちが絵本を理解するための手助けと成り得るだろうか？

その本は児童たちにとって年齢や発達段階にとって適切であろうか？

さらに、その内容、テーマあるいは言語はほかの分野と関連があるのだろうか？ それは児童たちが学んでいる他教科との関連がいかせるかどうかであろうか？ というようなことを本を選ぶ際には十分に考慮しなければならない。

3. よい読み手になるためのテクニック

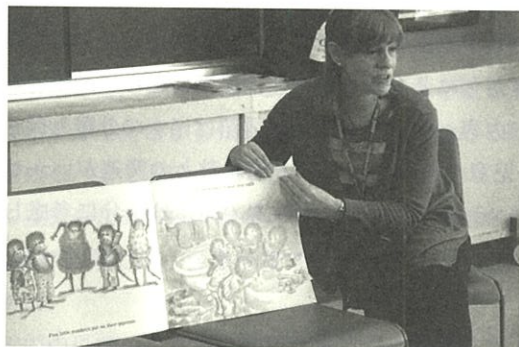
児童たちのためにそれらの基準を満たした物語を選んだ時、次のステップとしてその物語を教師自身が十分に理解、熟知することである。ただ物語を読むことと語り部のように演じることでははっきりとした相違点があることを理解しなければならない。

まず、最初の手順として教師は本を持って、子供たちと多少のやり取りを交えながら正確に文章を読んでいく。読み聞かせでは必ずと言っていいほど練習が必要となる。練習の際には声を出しても、あるいは黙読しても何ら差し支えはない。大切なことは非母語話者にとって知らない単語の意味や発音を十分にチェックすることである。

時折、インターネットなどでもその有名な絵本を書いた著者が、自作の本を使いながら読み聞かせを行っている映像を見つけることがある。視線を落とさず見上げるようにして、子供たちとアイコンタクトを取りながら一番後ろにいる全員の児童たちまで全員に声が届くように読み聞かせをする。視線を児童たちのほうに向け、彼らの興味と理解をチェックすることはその物語の内容とメッセージを伝える上で大変重要な役割となる。

絵を見せながら全員が見えていることを確認し、1つ1つ丁寧に指で指し

示しながら絵についての話をする。ブックスタンドや下の写真のような椅子を使うことはたいへん有効であり、一人でページを捲ったり本を手で支えることなく、座りながらゆったりとした気持ちで、物語や児童たちに集中することができるようになるからである。



Five Little Monkeys Jumping on the Bed の読み聞かせの場面

感情を込めてゆっくりと話をするが、時折読む動作を止めて間をいれ、コメントをしながら、児童たちからのアイデアや発言を引き出すことを忘れないようにする。児童たちを物語の中へと引き込むために彼ら自身の経験を尋ねたり、読み終わった後での発展活動の準備も怠らないようにしなければならない。

なぜなら、児童たちを参加させることは読み聞かせ活動において、一定の役割を果たす故に、前もって準備されていなければならないからである。児童たちはこれらの活動の中では受け身としてでなく、多少の個人差はあったとしても全体的、最終的には能動的になれるように導かれていくことが理想的である。

ここで述べたいことは、読み聞かせの際に一体どの程度英語と日本語を使い分けて授業を進めていくかということが挙げられる。

最初に、児童たちに安心感を持たせ、緊張感を無くし、物語の内容は彼らの理解力の範疇に収め、英語と日本語との両方を上手く使い分け、読み聞かせを始める前から興味を失わせないようにすることが大切である。

比較的難易度の高い単語を使う“A Color of His Own”について論じたいと思うが、もし教師が1つの物語を何度も繰り返して読んだとしたら、児童たちはその意味を徐々に理解し、やがては十分にその物語の世界へと入っていくことができるようになり、英語の語彙力は必然的に上がっていくであろう。

L1を理解する児童たちにとって、読み聞かせの中では、児童たちは物語そのものに関心を示し、自然に内容を楽しむことができる。教師が外国語習得の教材として物語を使う時、それを一体どのように児童たちに理解してもらえるかを考慮すべきである。そして、L2の量を工夫して、他の言語の物語でも楽しむことができるようになることが理想的である。

4. 読み聞かせ前の活動

物語を読み始める前に、本の表紙を一緒に見ることによって教師は児童たちの興味を引き出すことができるようになる。

“Brown bear, Brown bear, What do you see?”の絵本と共に“What do you see?”または“What animal is this?”と児童たちに尋ねてみる。児童たちはただ単に“熊”とだけ答えるかも知れないが、そこで教師たちは英語に言い換えて“Yes, a bear.”そして“What color is it?”と尋ねてみる。

児童たちは彼らのレベルによっては“茶色”あるいは“brown”と答えるかも知れない。今度はさらに“Is it big or small?”と質問しながら、“big”または“small”の意味をジェスチャーを使って表現することによって、児童たちにその単語の使い方を教えることが可能となる。英語、あるいは日本語で“熊さんを見たことがありますか?”“誰か熊さんを好きな人はいますか?”などのように児童たちへ簡単な質問を投げかけることによって、さらに彼らを物語の中心へと誘い込んでいくことが可能となるはずである。

それから、“Is he a happy bear or sad bear?”“Where does he live? In a forest or in a zoo?”という英文からの質問を与えることによって、児童たちのさらに外国語を理解したい、聞きたいというモチベーションが高められるようになる。

5. 読んでる間の活動

絵本を読み始める時、ゆっくりと読みながら児童たちの反応を注視し、物語を理解できるように文章と文章の間隔を空け、必要な時は単語や文章を繰り返して読んでみる。また強調すべきシーンではジェスチャーを使ったり、指で絵を差し示したりする。

もし難しい単語があったなら、より簡単な単語に差し替えることも必要である。例えば“A Color of His Own”の中で「heather (ヘザー)」という紫の花が登場するが、おそらく日本の児童たちにはこの花には馴染みがないかも知れない。そこで教師たちは、より日本人に親しみの深い、例えば「lavender (ラベンダー)」のような同じ紫の花に置き換えて物語を進めていくことになる。

なぜならば、読み聞かせの中で、もし馴染みのない単語が数多く出てきたとしたら児童たちは戸惑い、物語を理解する壁になってしまう。

児童たちは物語が進行する過程で不安やフラストレーションを感じながら“やっば英語が難しい、分からない!”となってしまうであろう。

しかし多くの絵本は反復的なフレーズを持っていることが多いので、児童たちは容易にそのリズムに合わせて徐々に音読に参加することができるようになる。この時、英語の意味が理解されているか否かを確認するために、児童たちにジェスチャーなどをしてみるように促してみることも有効である。

6. 読み終わった後の活動

絵本を読み終わり、児童たちにその物語の楽しさを再現させるために、読み手である教師、あるいは友達同士の間で話し合い、共有させることをお勧めする。

例えば“Pete the Cat”の中で主人公である猫のPeteが常に物事をポジティブに捉えながら自分に起こった問題を受け止めていったように、教師も過去の自分自身の個人的な経験を児童たちに話してみるのもよいだろう。

さらには、英語学習につながる活動としては、絵本の読み聞かせの後、簡

単なQ&Aやクイズ、ゲーム、塗り絵などをさせるとか、自分なりの似たような物語を日本語で書くとか、そのほかの活動もアイデアを取り入れるなどの工夫も考えられる。

7. まとめ

もし、教師たちがカリキュラムの中で絵本を使えば、児童たちの興味を十分に引き出し、理解しようとする気持ちを作り出す手助けができるに違いない。

英語が2020年から小学校3～4年生の必修活動、また5～6年生の1つの教科に移行するという事実において、児童たちの知識の発達とlistening, speaking, reading, writingの4つのスキルの上に基づいたコミュニケーション能力を育成するためのカリキュラムに必然的に焦点が当てられる。

これからの目標として、教師が、児童たちのためにその活動範囲内でのインタラクティブな読み聞かせを加えることにより、適切に英語を使い、また物語について書いたり話したりすることを通して、演劇、図工的活動、想像力の表現の機会をもたせてくれるものと信じている。

絵本は我々を魅惑的な世界へと導いてくれ、すべての授業の中で重要な役割を果たしてくれる、素晴らしい、素晴らしい宝箱なのである。

参考文献

- Cameron, Lynne (2001) *Teaching Languages to Young Learners*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Elley, Warwick (1989) “Vocabulary Acquisition from Listening to Stories,” *Reading Research Quarterly* XXIV(2), 174-187.
- Krashen, Stephen D. and Tracy D. Terrell (1983) *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*, Longman, London.
- Wright, Andrew (1995) *Storytelling with Children*, Oxford University Press, Oxford.

本章で使用された絵本

The Very Hungry Caterpillar, Eric Carle, Scholastic Inc.

A Color of His Own, Leo Lionni, Scholastic Inc.

Five Little Monkeys Jumping on the Bed, Retold and Illustrated by Eileen Christlow, Clarion Books.

Brown Bear, Brown Bear, What do you see? Bill Martin Jr. and Eric Carle, Henry Holt Com.

Pete the Cat—I Love My White Shoes, Eric Litwin and James Dean, Harper Collins.

第 VI 部

異文化理解

